

基礎ゼミナールの目的と実際

小林 勝法・野村美穂子・横川 潤

The Aim and the Results of the "Basic Seminar"

Katsunori KOBAYASHI, Mihoko NOMURA, Jun YOKOKAWA

Abstract

Diversification and deterioration of college students' scholastic ability and motivation have become more and more serious in these days. It has become important to teach about university education system and study skills and to motivate college students. Over 40% of Japanese universities had Basic Seminar for freshman in 1997.

A survey among students of Faculty of International Studies at Bunkyo University shows that Basic Seminar almost achieve its aim. But teachers think that there are several problems to improve. They are to reduce the number of students, to increase discretion of teachers, and select minimum essentials. It is also important to have cooperation with other courses and to exchange teaching experiences one another.

はじめに

大学の大量化に伴って、学習経験と学力水準、学習意欲が様々な学生が入学してくるようになった。そこで、これらの新入生に対し、大学での学修についての知識と技能を教授する大学導入期の教育が重要性を増しており、文教大学国際学部でも2000年度から始まった新しいカリキュラムでは、基礎ゼミナールを1年次の必修科目として開設した。この科目はそれまでに開講しておらず、教員も担当経験がなかったので、手探りの状態での出発であった。

そこで、本稿ではこの基礎ゼミナールの大学教育改革における位置づけについて概観し、受講生を対象にしたアンケート調査と担当教員の実施報告から基礎ゼミナール実施上の問題点を明らかにし、それについて検討したい。

I. 大学教育改革における基礎ゼミナールの位置づけ

1. 大量化・全入化による学生の質の変化

日本の大学は戦後、一貫して大量化の道を行ってきた¹⁾。駅弁大学と揶揄されたり、マスプロ教育と批判されながらも、日本の大学は量的拡大を続けてきた。そして、ついに進学率が50%を超えるM. トロウの言うところのユニバーサル化時代を迎えた²⁾。

量の拡大だけに留まらず、これまで日本の大学が経験したことのない質の変化も起きている。一つ

は、学力の多様化である。高等学校の学習指導要領は改訂する度に、学習時間数は減少するし、科目の多様化が進んでいる。高等学校教育はもはや大学との接続を意図していないのである。生物を履修していない学生が医学部に進学しているとして問題になったが、いくつもの専門分野で同じようなことが起きていて、大学は補習授業を開講せざるを得なくなった。

二つ目は学力の低下である。高等学校までの学習時間数が減少していることから、高校卒業者の学力水準が低下しているのは当然であるが、受験競争が厳しければ大学入学者の学力水準をある程度は保つことができる。進学率が50%であろうと、進学希望率がそれを上回れば一定の学力水準を持った学生を選抜できるからである。しかし、事態はそうではない。進学を希望するものはどこかの大学には入学できるという全入時代に突入したのである。学力の低い学生をそのまま入学させる時代である。

そして、さらに深刻なのが、意欲の低下である。不本意入学という言葉がある。これは、希望する大学に入学できず、第二志望以下の大学に入学したため、意欲がわかずその大学にうまく適応できない状況を説明した言葉である。しかし、近年では不本意就学の方が問題になっている。本人は大学に進学したいとは思っていなかったのに入学した学生の不適応の問題である。「親に頼まれたから大学に来ている」と公然と話す学生も見かけるようになった。このような学生は、当然学習意欲がほとんどない。卒業するために必要な最低限の単位だけが欲しいのである。このような学生や大学の状況は米国のコミュニティ・カレッジにも見られるようで、その絶望的な状況は『恐るべきお子さま大学生たち』³⁾に詳しい。

以上述べたような状況下にあっては、大学の新生に一律に教育することはますます困難になっている。そこで、これらの新生に対し、大学での学修についての知識と技能を教授し、動機付けを図る大学導入期の教育が重要性を増して来ており、各大学は様々な試みをしている。そのうちの一つが、大学1年次のゼミナール開講である。

2. 他大学の状況

1991年の大学設置基準大綱化以降、多くの大学で大学1年次のゼミナールが開講されるようになった。これらの科目は、「基礎ゼミナール」とか「基礎演習」「教養ゼミナール」「フレッシュマンセミナー」などと呼ばれている。2001年6月2日の日本経済新聞には、このような科目の事例が大きく紙面を割いて紹介されている⁴⁾。そこで紹介されている新潟経営大学では、基礎演習の開講によって学生の不適応を改善し、学ぶ動機付けができたため、退学者と出席不良学生数が減少したという⁵⁾。大衆化・全入化した大学にとっては、退学者や出席不良学生の問題は切実である。その問題解決に大学1年次のゼミナールが効果を上げているというのである。

奈良たちの調査によれば、1997年の時点で全国の国公立大学581校のうち41.1%で大学1年次のゼミナールが開講されている⁶⁾。最近では実施校がもっと増えていることであろう。そして、それらの科目で行われている内容のうち最も多いのが、「レポート」で56.3%、次いで「討論」(39.6%)、「発表」(36.3%)である。

II. 文教大学国際学部の基礎ゼミナール

1. 基礎ゼミナールの目的と内容

前章で述べたような認識に立ち、2000年度入学生から適用されたカリキュラムでは、基礎ゼミナールを1年次の必修科目として開設した。原則として全ての教員が4年間の中で一度は担当することとし、学生の所属するゼミナールは学籍番号を使って機械的に決めるため、同一の授業内容であることが求め

られた。そこで、共通の授業概要（シラバス）を作成し、それに基づいて授業を展開することにした。
その授業概要には授業の目的について、次のように書いてある。

- 大学での学習に必要な知識を学び、スタディ・スキルを習得すること。
- 少人数のクラス編成で、一緒に学ぶ学生同士が助け合ったり、協力したりしながらさまざまな課題に取り組むこと。
- 大学教員との親密な人間的交流を通して、学問研究の世界を垣間見ること。

そして、授業内容については、以下の通りである。

1. 大学や大学の教育システムについて学ぶ。
 - ①学習計画をどうたてるか（履修登録など）。
 - ②コース選択へ向けての準備を始める。
2. 大学での生活と学習について学ぶ。
 - ①4年間をどう過ごすか。
 - ②短期留学と海外研修プログラムについての説明。
 - ③卒業後の進路・就職に向けての準備を始める。
3. 講義の受け方やノートの取り方を学ぶ。
4. 読書のしかたを学ぶ。
5. 図書館の利用法を学ぶ。
6. 情報（図書や雑誌、インターネット、インタビューなど）を集め、整理する方法を学ぶ。
7. 討論のしかたを学ぶ。
8. レポートの書き方、発表のしかた、試験準備のしかたを学ぶ。
9. 課題図書の中より一冊選び、レポートを作成する。

2. 実施方法

同一の授業内容で行うことを保障するために、共通テキスト『国際学部でいかに学ぶか』と『教員マニュアル』を作成した。共通テキスト『国際学部でいかに学ぶか』の構成（目次）は以下に示すとおりであり、授業概要（シラバス）に記載した授業内容に対応している。『教員マニュアル』は、学生指導上の要点の他、スケジュール管理に関する申し合わせなどを記載して、短期留学の説明会や「国際学部教育を考える懇談会」を基礎ゼミナールの時間を使って合同で行ったり、図書館ツアーをゼミナールごとに順番に行ったりすることを円滑にできるようにした。

テキスト目次

- 第1章 文教大学国際学部の目的とカリキュラム
- 第2章 学生生活を充実させるために
- 第3章 図書館の利用方法
- 第4章 講義の受けかた
- 第5章 講義ノートのとりかた
- 第6章 論述試験の受けかた
- 第7章 レポートの書きかた

第8章 レジュメの作りかた

第9章 プレゼンテーション（口頭発表）のしかた

第10章 課題図書とブック・レポートの書き方

3. 2000年度の実施結果

基礎ゼミナールを担当した教員は初めて担当したので試行錯誤の連続であった。その経験を次年度に活かすために、指導報告書（A4判1枚）を提出してもらい、それをまとめて『基礎ゼミナール指導報告書』とした。2年目に当たる2001年度の担当教員にはこの『基礎ゼミナール指導報告書』が役に立った。その2000年度版からどのように実施したのかを読みとってみよう。個々の詳しい実践報告については第IV章を参照されたい。

まず、どの教員にも共通してみられることは新入生という異文化との接触による戸惑いである。球技大会の賞品の飲食券を一部の学生だけで使ってしまったことなど様々なハプニングが起り、そのことから現代の学生気質について知ることができたと報告している。しかし、教員は戸惑ってばかりはいられない。迷子たちを正しき道へ導かねばならない。その点で、テキストは役に立ったという意見が多い。

しかし、そのテキストにしても「指導する分量が多すぎる」という意見も強い。そして、実際の授業はマニュアル通りではなかった。実際に行ってみて、個々の教員が指導内容や順番を調整したり、工夫したりしていた様子がうかがえる。また教員によって指導の力点の置き方が違うようにも見受けられた。担当教員がテキストにとらわれずに柔軟に対応し、それぞれのゼミナールで成果を上げたようである。中には、コンパをしたり、大学近辺へピクニックに行ったり、学外実習やゼミ合宿をしたりしたケースもあった。

Ⅲ. 学生のアンケート結果

1. アンケートの概要

国際学部基礎ゼミナール委員会は、次年度以降の基礎ゼミナールを運営する上での参考資料を得ることを目的に、「基礎ゼミナールに関するアンケート」を基礎ゼミナール受講生全員を対象にして、春学期の最後の授業（2001年7月10日もしくは16日）で実施した。アンケート用紙を授業中に配布し記入させ回収する方法をとった。基礎ゼミナール11クラスのうち9クラス分232名のうち208名から回答が得られた。回答率は89.7%になる。

2. 結果と考察

アンケートは、5段階で答える質問が18項目、自由記述で答える質問が3項目、合計21項目から構成されている。以下、質問項目ごとに結果と考察を述べる。そして、最後に教員別の評価について検討する。

(1) 国際学部のカリキュラムが理解できた

標記の質問に対し、あてはまるか否かを5段階で評定させた。結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が50.0%であった。大学の教育システムや専門領域の学問体系を知らなかった新入生が、資料と教員の説明だけで4年間のカリキュラムを理解することは容易なことではない。理解しているものが50.0%というのは教える側にとっては満足のいく結果ではないだろうか。5段階尺度をそのまま数値化して平均を取ると、3.47であった。これは、18項目中上位5位に位置する

表1 集計結果

Q1. 国際学部カリキュラム	あてはまる	やや…	どちらともいえない	あまり…	あてはまらない	合計
国際コミュニケーション学科	11	47	32	4	2	96
国際関係学科	5	40	54	7	4	110
全体	16	87	86	11	6	206
全体 (%)	7.8	42.2	41.7	5.3	2.9	100.0
Q2. 国際コミュニケーション学科カリキュラム						
国際コミュニケーション学科	11	45	35	3	2	96
国際関係学科	0	3	30	13	22	68
全体	11	48	65	16	24	164
全体 (%)	6.7	29.3	39.6	9.8	14.6	100.0
Q3. 国際関係学科カリキュラム						
国際コミュニケーション学科	4	8	32	15	24	83
国際関係学科	6	43	54	6	2	111
全体	10	51	86	21	26	194
全体 (%)	5.2	26.3	44.3	10.8	13.4	100.0
Q4. 学生生活を充実させるには						
国際コミュニケーション学科	13	34	38	11	0	96
国際関係学科	6	53	42	4	6	111
全体	19	87	80	15	6	207
全体 (%)	9.2	42.0	38.6	7.2	2.9	100.0
Q5. 留学制度など						
国際コミュニケーション学科	16	40	27	9	4	96
国際関係学科	4	34	51	14	7	110
全体	20	74	78	23	11	206
全体 (%)	9.7	35.9	37.9	11.2	5.3	100.0
Q6. 卒業後の進路						
国際コミュニケーション学科	16	30	28	15	6	95
国際関係学科	24	33	34	16	3	110
全体	40	63	62	31	9	205
全体 (%)	19.5	30.7	30.2	15.1	4.4	100.0
Q7. 図書館の使い方						
国際コミュニケーション学科	23	42	25	6	0	96
国際関係学科	46	48	14	3	1	112
全体	69	90	39	9	1	208
全体 (%)	33.2	43.3	18.8	4.3	0.5	100.0
Q8. 講義の受け方						
国際コミュニケーション学科	14	50	27	4	1	96
国際関係学科	22	50	34	3	2	111
全体	36	100	61	7	3	207
全体 (%)	17.4	48.3	29.5	3.4	1.4	100.0
Q9. 講義ノートの取り方						
国際コミュニケーション学科	12	32	41	9	2	96
国際関係学科	11	32	53	10	6	112
全体	23	64	94	19	8	208
全体 (%)	11.1	30.8	45.2	9.1	3.8	100.0

Q10. 論述試験の受け方	あてはまる	やや…	どちらともいえない	あまり…	あてはまらない	合計
国際コミュニケーション学科	7	23	46	15	5	96
国際関係学科	12	20	51	19	9	111
全体	19	43	97	34	14	207
全体 (%)	9.2	20.8	46.9	16.4	6.8	100.0
Q11. レポートの書き方						
国際コミュニケーション学科	17	47	23	7	2	96
国際関係学科	22	43	34	11	2	112
全体	39	90	57	18	4	208
全体 (%)	18.8	43.3	27.4	8.7	1.9	100.0
Q12. レジュームの作り方						
国際コミュニケーション学科	11	37	32	13	3	96
国際関係学科	17	38	36	13	6	110
全体	28	75	68	26	9	206
全体 (%)	13.6	36.4	33.0	12.6	4.4	100.0
Q13. プレゼンテーションのしかた						
国際コミュニケーション学科	11	42	24	16	3	96
国際関係学科	11	36	39	18	7	111
全体	22	78	63	34	10	207
全体 (%)	10.6	37.7	30.4	16.4	4.8	100.0
Q14. 触発された						
国際コミュニケーション学科	6	19	44	17	10	96
国際関係学科	13	27	50	13	8	111
全体	19	46	94	30	18	207
全体 (%)	9.2	22.2	45.4	14.5	8.7	100.0
Q15. 授業に満足している						
国際コミュニケーション学科	8	22	40	15	10	95
国際関係学科	25	20	40	19	8	112
全体	33	42	80	34	18	207
全体 (%)	15.9	20.3	38.6	16.4	8.7	100.0
Q16. 意欲的に取り組んだ						
国際コミュニケーション学科	8	26	43	12	7	96
国際関係学科	12	36	46	16	1	111
全体	20	62	89	28	8	207
全体 (%)	9.7	30.0	43.0	13.5	3.9	100.0
Q17. 教員と親しくなれた						
国際コミュニケーション学科	14	23	44	7	8	96
国際関係学科	12	21	45	22	12	112
全体	26	44	89	29	20	208
全体 (%)	12.5	21.2	42.8	13.9	9.6	100.0
Q18. 友達ができた						
国際コミュニケーション学科	39	42	13	2	0	96
国際関係学科	61	29	18	2	1	111
全体	100	71	31	4	1	207
全体 (%)	48.3	34.3	15.0	1.9	0.5	100.0

(表2参照)。このことから、「大学や大学の教育システムについて学ぶ」というこの授業の目的は概ね達成されていると考えられよう。

表2 各質問項目の平均点

18.	友達ができた	4.28
7.	文献検索の仕方など図書館の使い方が理解できた	4.04
8.	講義の受け方が理解できた	3.77
11.	レポートの書き方が理解できた	3.68
1.	国際学部のカリキュラムが理解できた	3.47
4.	学生生活を充実させるにはどうすればよいかを理解できた	3.47
6.	卒業後の進路について考えた	3.46
12.	レジュメの作り方が理解できた	3.42
9.	講義ノートの取り方が理解できた	3.36
5.	学制度や海外研修プログラムが理解できた	3.33
13.	プレゼンテーションのしかたが理解できた	3.33
16.	私はこの授業に意欲的に取り組んだ	3.28
15.	私はこの授業に満足している	3.18
17.	教員と親しく慣れた	3.13
10.	論述試験の受け方が理解できた	3.09
14.	この授業に触発された	3.09
2.	国際コミュニケーション学科のカリキュラムが理解できた	3.04
3.	国際関係学科のカリキュラムが理解できた	2.99

(2)国際コミュニケーション学科のカリキュラムが理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が36.0%であった。国際コミュニケーション学科だけでは、58.3%と高い。国際関係学科では4.4%と低く、無回答の学生もいる。自分の所属する学科の質問だけに回答しているようである。学生は他学科については関心を示さないであろうし、教員も限られた授業時間数の中で他学科まで十分に説明する時間をとれなかったのかも知れない。自分が所属する学科のカリキュラムに対する理解としては概ね高いと言える。

(3)国際関係学科のカリキュラムが理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が31.5%であった。国際コミュニケーション学科だけでは14.5%と低く、国際関係学科でも44.1%であり高い。自分が所属する学科のカリキュラムに対する理解が高くないのは問題であり、指導方法を見直す必要がある。

(4)学生生活を充実させるにはどうすればよいかを理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が51.2%であった。「大学での生活と学習について学ぶ」や「4年間をどう過ごすか考える」というこの授業の目的は概ね達成されていると言えるのではないだろうか。

(5)留学制度や海外研修プログラムが理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が45.6%であった。国際コミュニケーション学科だけでみると、58.3%であり、高い。国際関係学科生は留学制度や海外研修プログラムに対して関心が低いだろう。学科の特性に関係することなので当然の結果とも言え

る。

(6)卒業後の進路について考えた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が50.2%であった。「卒業後の進路・就職に向けての準備を始める」というこの授業の目的は概ね達成されていると言えるのではないだろうか。

(7)文献検索の仕方など図書館の使い方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が76.5%であった。5段階尺度をそのまま数値化して平均を取ると、4.04であり、18項目中上位2位に位置する(表2参照)。「図書館の利用法を学ぶ」や「情報(図書や雑誌、インターネット、インタビューなど)を集め、整理する方法を学ぶ」というこの授業の目的は十分に達成されていると言える。

(8)講義の受け方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が65.7%であった。5段階尺度をそのまま数値化して平均を取ると、3.77であり、18項目中上位3位に位置する(表2参照)。「講義の受け方を学ぶ」というこの授業の目的は十分に達成されていると言える。

(9)講義ノートの取り方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が41.9%であった。「講義ノートの取り方を学ぶ」というこの授業の目的が十分に達成されているとはいいがたい。

(10)論述試験の受け方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が30.0%であった。新入生はアンケート調査時には定期試験をまだ受けていないので現実的な問題としてとらえられていないのかも知れない。もっともこのような問題は個々の授業でそれにあった指導をした方がよいのかも知れない。

(11)レポートの書き方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が62.1%であった。5段階尺度をそのまま数値化して平均を取ると、3.68であり、18項目中上位4位に位置する(表2参照)。「レポートの書き方を学ぶ」というこの授業の目的は十分に達成されていると言える。

(12)レジュメの作り方が理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が50.0%であった。「情報を整理する方法を学ぶ」や「発表のしかたを学ぶ」というこの授業の目的は概ね達成されていると言えよう。

(13)プレゼンテーションのしかたが理解できた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が48.3%であった。「発表のしかたを学ぶ」というこの授業の目的は、プレゼンテーションに関しては十分には達成されているとはいいがたい。

(14)この授業に触発された

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が31.4%であった。従来は学生は3年次にゼミナールに所属するまで教員と親しく接することが稀であった。新入生でありながらそれができる機会であるのに、触発されることが少なかったというこの結果は、教える側にとって誠に残念であり寂しいことである。教える態度を振り返る必要があるかも知れない。

(15)私はこの授業に満足している

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が36.2%であった。教員は慣れない授業に対して大変苦勞して臨んでいる。学生のレポートの添削に多くの時間を費やしている。それなのにこの結果は誠に残念である。授業内容や指導方法など、多角的に検討して改善する必要がある。

(16)私はこの授業に意欲的に取り組んだ

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が39.7%であった。この授業は学習することが多いため、一つ一つのスタディ・スキルを習熟するには十分な時間をかけられない。そのために学習の的を絞ることができず、意欲的に取り組むことができないのではないだろうか。授業内容や指導方法など、多角的に検討して改善する必要がある。

(17)教員と親しくなれた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が33.7%であった。上記(14)で述べたことと同じことが言える。教える態度を検討する必要がある。

(18)友達ができた

標記の質問に対する結果は表1の通りである。「あてはまる」+「ややあてはまる」が82.6%であった。5段階尺度をそのまま数値化して平均を取ると、4.28であり、18項目中上位1位である(表2参照)。「一緒に学ぶ学生同士が助け合ったり、協力したりしながらさまざまな課題に取り組む」というこの授業の目的は十分に達成されていると言える。ホームルームがない大学にあっては、友人を作り情報のネットワークを持つことは4年間の大学生活をおくる上で極めて重要なことである。基礎ゼミナールがそのネットワークをつくるという重要な役割を果たしていると言える。

(19)その他、ゼミで学んだことを書いて下さい。

この自由記述式の回答は全部で103件あった。しかし、そのほとんどが上記の18項目と同じことであった。それ以外には以下のようなものがある。

- ・将来の夢について、前向きに考えるようになった。
- ・幅広くものごとを見ること。
- ・新聞を読むことの重要性。

(20)この授業のどの点が最も良かったと思われますか。

この自由記述式の質問には全部で148件と多数の回答があった。それらは内容によって大きく4つに分類できる。それは、①スタディ・スキルと②友達、③教員、④行事の4つである。

それぞれについて主な回答を以下に示す。なお、その他には「卒業後の進路を大まかに決めることができた」というのもあった。

①スタディ・スキル

- ・大学の勉強の方法を教えてくれた。今後の授業に役に立つと思います。
- ・レポートを書く練習ができたこと。いろいろな参考文献を調べることができるようになった。
- ・今まで高校などでやってきたレポートとは全く違うレポートのまとめ方を学べてよかったと思う。
- ・レジュメ・レポート・プレゼンなどの実践的なことができた。

②友達

- ・少人数だから、ほかの人たちとのコミュニケーションが豊富にとれたこと。
- ・クラスに留学生がいたので、留学生と仲良くなれてよかったです。
- ・最後にみんなで一つのレポートを作り上げた点。
- ・友達がいっぱいできた。

③教員

- ・先生が良かったし、勉強以外のことを学べて良かったです。
- ・先生がとても熱心でよい人だった。
- ・レジュメを書くとき、親身になって教えてもらったこと。
- ・人生経験豊富な講師に出会えたこと。
- ・将来について考えさせられる講義があったところ。

④行事

- ・イベント（球技大会、合宿など）。
- ・懇談会など、みんなと話し合える場を持つことができたこと。

①現在の基礎ゼミの授業内容以外に入れてほしい内容がありましたら、具体的にあげてください。

この自由記述式の質問には全部で34件の回答があった。主な回答を以下に示す。

- ・最初の方に交流合宿をしてほしかった。
- ・基礎ゼミはあまり必要ない。
- ・カリキュラム内の留学だけではなく、国際的に活躍できる職場の紹介。
- ・もっと留学制度や海外研修プログラムについて詳しく聞きたかった。
- ・ディベートとか？！
- ・もっとほかのゼミとの交流があるとよいと思う。
- ・もっと専門的な話が聞きたいです。
- ・グループ発表。

②担当教員別評価結果について

前述したように基礎ゼミナールは1年次の必修科目であり、学生が所属するゼミナールは学籍番号を使って機械的に決定される。そこで、各担当教員は共通テキストを使用し、授業が均質になるよう期待されている。しかし、担当教員の個性もあるし、教員によってどの学習内容に力点をおくかの相違もあろう。そこで、これらのことが学生の達成度にもどのように反映したかについて、検討しよう。

18の質問項目について、担当教員ごとの平均値を求めグラフにしたものが図1である。教員AからLの合計9本の折れ線グラフが交差しているので見づらいが、まず、平均値の分散を見てみよう。標準偏差値がもっとも小さいのは、「講義の受け方」(S=0.15、M=3.7)で、次いで「学生生活の充実」(S=0.18、M=3.47)、「講義ノートの取り方」(S=0.18、M=3.36)である。これらの平均値は中の上から上の間である(表2参照)。とくに特徴があるというわけでもない。テキストでは、「学生生活の充実」が13頁とテキスト中最大の頁を割いているのに対し、「講義の受け方」と「講義ノートの取り方」はともに1頁であることから、分散が小さい理由がテキストにあるわけでもなさそうである。これらの項目は教員の個性が反映されにくかったり、教員がとくに重視する項目ではないからではないかと推察する。

一方、標準偏差値がもっとも大きいのは、項目2と3以外では、「授業満足度」(S=0.55、M=3.18)で、次いで「触発された」(S=0.47、M=3.09)、「プレゼンテーション」(S=0.46、M=3.33)、「教員と親しくなれた」(S=0.46、M=3.13)である。平均値の最も高い教員と最も低い教員の差が「授業満足度」で1.43、「触発された」は1.29、「プレゼンテーション」は1.56、「教員と親しくなれた」は1.61となっている。この結果を見ると、教員の個性や力点の相違がこのような項目に反映していることが推察される。

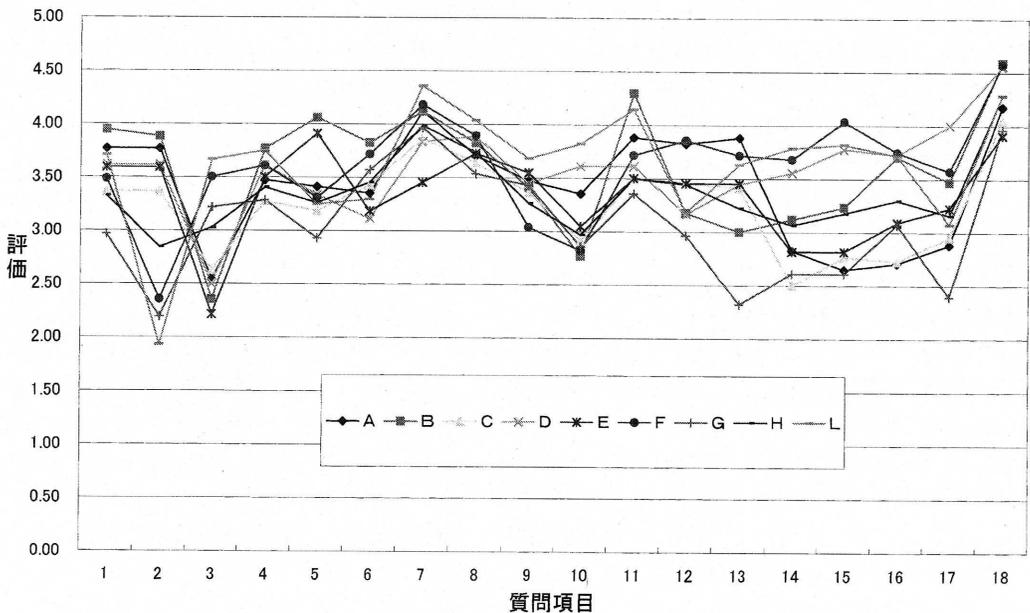


図1 教員別平均値

IV. 実施報告

1. 野村美穂子ゼミナール (2000年度)

基礎ゼミナールは従来のカリキュラムには存在しなかったものであり、大学生生活全般への導入という科目の性質自体から見てももともとそれが専門の教員などいないため、担当する側も試行錯誤の日々、悪くいえば〈行き当たりばったり〉(もしかしたら〈行き当たりバタリ!〉で倒れていたのかもしれないが……)の毎回であった。ともかく、以下、初年度の実践例を簡単に報告する。

初回は番外編として入学直後のオリエンテーション中に組み込まれており、まず①基礎ゼミナールの意味および大学生生活や事務的な事項に関する話②担当者である私(野村)自身の自己紹介③出席確認を兼ねて学生全員の自己紹介を行った。この回でわかったことは、学生のほとんどが予想以上に緊張しているということである。自己紹介の途中でことばにつまる学生も少なくなく、当節の学生は自己アピールに長けているのではないかという私の勝手な思い込みは、良くも悪くも半分以上覆された。ただし、これは多人数の前での場合である。注目を浴びる人数が少なくなると彼らは途端に“しゃべり”出す。事実、この初回の授業の翌日、用があって私の研究室にやってきた2人組は、前日かぶっていた猫(?)をすっかり脱ぎ捨て、お茶をおかわりしながらにぎやかに好きなだけ話して出ていった。

第2回からはテキストと教員用マニュアルにそって進めていった。マニュアルに従い、特に前半はテキストの“輪読”がメインとなったが、大学にそろそろ慣れてきて遅刻・欠席が出始めた3回目あたり以降、日を追って良くなる気候のせいもあって輪読は時に眠気を誘ったようである。輪読形式は教壇からの一方的な講義というわけではないが、どうしても“指名された人間”のほかは気が緩んでしまう。関連する話で学生が関心もちそうな話をしたり、背筋も凍らんばかりのくだらないオヤジ

(オバサン?) ギャグを入れてみたりしたが、既に本格的に眠くなってしまった学生にとってはあまり効果はなさそうであった。中で比較的うまく学生の眠気をさますことができたのは、「講義の受けかた」と関連して、私自身が教養課程の学生だった頃の“試験対策委員”の話をしたときであったが、ある意味非常に素直で真面目な文教の現代の学生たちは、「へーえ」と感心したような顔で聞いてはいたものの、例えば自分たちもそのような企画をたててみようなどとは思えないようであった。“試験対策委員”という例自体の善し悪しはともかく、入学直後の学生たちは、まだ〈自分たち自身の手で何かができる／何かを行おう〉という意識は乏しい。

この基礎ゼミナール前半には、途中、希望により各クラスが“早いもの勝ち”で予約して図書館ツアーを行うプログラムも含まれている。私のクラスは6月初めに行ったが、結論から言えば、あまり効果的とは思われなかった。図書館職員の方々は熱心に指導して下さったが、クラス全員を半分に分けても15名程度になるためコンピュータ検索の実演も見にくいし、また、周囲に何も存在せずしかも敷地の狭いこの湘南キャンパスの環境にあって入学後すぐならともかく6月ともなれば学内のことは学生も既によくわかるようになってきており、したがってツアー自体にあまり関心を示さない学生も多い。図書館ツアーは、実施のしかたにもう一工夫必要であろう。資料の探しかたなどについては学生もまだわからないことが多いので、例えば、身近な開架式図書館とは違って閉架式ではあるものの蔵書数が抜群である国立国会図書館の利用法を教えたり、何かテーマを与えてその関連図書を調べてこさせたり、というような内容をとり入れるのは有用だと思われる。

授業後半は「論述試験の受けかた」「レポートの書きかた」「レジュメの書きかた」「発表のしかた」などが中心となり、実践的な内容が多くなっていく。「論述試験の受けかた」では、テキストのほか、数年前のオープンキャンパス小論文講座の際に使用した資料(作成者:藤井・野村)を用い、実際に過去の推薦入試の問題を解いてくることを課して、後でコメントをつけて返却した。この提出課題を見る限り、学生の文章能力は本当にピンからキリまでさまざまであるが、それ以上にまず〈自分の頭で考える〉ということにあまり慣れていないという印象を受けた。「レポートの書きかた」では、たまたま拙稿「レポートってどう書くの?」(小坂・椎野編『テキスト社会学』所収)があったため、こちらの方を中心に用いて、特に重要なところは詳しく解説した。最終回では、授業中盤であらかじめ分けておいたグループ別に、自分たちでテーマを決め、レジュメを作って発表するというのをさせたが、初めてのことであり、“あまりにも簡単なレジュメ”で“下ばかり向いて話”し“途中で自分でも混乱してしまって何を話しているのかわからなくなる”ような発表も散見された。しかし、いずれにしてもこのようなことは場数を踏まないで上達しないものであり、とりあえずは〈何とかやってみよう〉ということでも良しとすることにした。

私のクラスでは、あらかじめ課題図書として『大学で何を学ぶか』(浅羽通明著:幻冬社文庫)を指定しておき、授業中も「レジュメのかきかた」のところで練習用に利用したほか、これを期末レポートの課題とした。

以上、授業の概要を簡単に述べたが、全体を振り返って反省ならびに感想を述べると概ね次のとおりである。

- ①長欠学生(および場合によってはその保護者)、また、出席してはいるものの入学後にやる気を失ったうえやりたいことがはっきりせず悩んでいる学生のケアが、思った以上に変である(私のクラスでは前者が2件、後者が1件あり、前者の学生たちは単位不足に苦勞しながら現在も何とかがんばっているようだが、後者の学生は結局退学という結果になった)。
- ②必修の授業である基礎ゼミナールでは、各方面から調査やアンケートの依頼が頻繁にあり、また特

に国際コミュニケーション学科は途中で留学説明会が2回入るため、進め方を工夫しないとささか忙しい授業になる。

③授業の前半、諸事情により一度予定外にキャンパス近辺のピクニックを行ったが、これが思いもよらぬ好評を博しクラスの一体感を高めたことから考えても、今後の基礎ゼミナールでは途中で一度くらい「遊ぶ」ことの必要性を検討した方がよいかもしいない(もともと、学内でふつうに生活しているだけではキャンパス周辺を歩く機会は少ないだろうが、実は湘南キャンパスは周辺を豊かな自然に恵まれ思わぬ植物や昆虫に出会うことができるという利点をもっており、そういったものに接することは特に都会っ子の学生にとっては良い経験となる)。

④後半になるにつれクラスの学生どうしの「和気藹々」感が高まり、その点では科目の設置目的自体の一つでもある「仲間作り」「友だち作り」はある程度達成されているとも言えるが、反面「それでも何となく孤立した感じ」の学生がやはり数名存在すること、授業がだんだん“ななあ”的な雰囲気になってくる(後者はもちろん担当教員である私の技量の問題も大きい)ことが気になった。

さて、私自身が大学に入学した約20年前のことを考えると、まだ細かい専攻に分かれず学部全体で一つのまとまりであった教養課程の1年半のみ“クラス”が存在し、語学や体育の授業などはこの“クラス”で分けられ、一応担任も存在した。ただし、新入生であった私たちは“クラス”と担任教員を知らされた後すぐに、その担任教員自身の口から「一応担任という制度はありますが、大学は高校までとは違い、だいたい学生が何か問題を起こしたというような場合だけ担任と関係が出てくるのです。したがって君たちはなるべく私と顔を合わせない方がよろしい」と聞かされた。「ふーん、そんなもんか」と思ったことを今でもはっきりと覚えている。その頃から考えると何やら隔世の感があるが、実際に基礎ゼミナールで担当した学生のうちの何人かがまる1年たった今でも私の研究室にときどき顔を出しているいろいろな話をしていくことからしても、大学に入った学生がまず最初に出会う授業であるこの基礎ゼミナールはやはり現在の学生たちにとって確かに意味のある科目であり、今後その責任は大きいものと思われる。

2. 横川潤ゼミナール(2000年度)

(1)授業の概要(丸印内は実施回を示す)

①オリエンテーションを行った。まず筆者(横川)が自己紹介を行い、その後、学生達に出身地、出身校、趣味、血液型などの自己紹介をさせた。まだ入学したて、高校生気分のぬけ切れぬ彼らは初々しく、高校時代のホームルームのような場所のあることを喜ぶ風が感じられた。主観的な印象ではあるが、地方出身者ほど、真面目さや純情さがにじみ、好ましく思えた。スリランカと韓国の留学生、フィリピンで育った学生がおり、また国内的にも北は仙台から南は鹿児島、佐渡島までを網羅し、国際学部の学生として「国際」を論じるに相応しいバックグラウンドといえた。国際関係学科の学生ゆえ、観光ビジネスコースまたは政治経済協力コースの説明を行い、希望調査をとった。前者と後者の割合は、およそ8対2の割合だった。

②文教大学の留学制度、特に筆者が引率予定のサンフランシスコ州立大学のホスピタリティ研修につき、説明を行った。おおむね留学に関し、高い関心を持つことを確認した。次回からプレゼンテーションを行う旨、実施の要領を説明した。出身地別に3、4人の班を結成し、日本の都道府県から一つを選び、その「食」を中心に研究発表をするよう、指示を行った。筆者の専門が食ビジネスおよび食文化であり、専門に関連したほうが、効率的かつ効果的な指導が可能と考え、かかるテーマとした。

③～⑦日本の都道府県から一つを選び、その「食」を中心に研究発表をさせた。クラスの多彩な出身地を反映し、内容は多岐にわたった。意欲的な発表が多く、感銘を受けた。フィリピンで育った学生

などは、フィリピンの家庭料理をこしらえ、全員が味見をし、印象的なプレゼンテーションであった。

⑧図書館見学を行った。人数が多いため、2グループに分け、図書検索の方法について図書館職員の手導を受け、図書館の有効な利用法につき、ビデオを視聴した。

⑨日本人論に関するエッセイの抜粋を配布し、日本人が海外旅行をし、偶然に日本人同士の目が合うと、つい視線をそらすという行動についてどう考えるか、クラス討議を行い、ミニレポートにまとめさせた。

⑩専門教育のイントロダクションとして、国際飲食事業論のモデル授業を行った。学生達になじみの深いファストフードを題材とし、まずマクドナルドとモスバーガーのどちらを好むかにつき挙手をさせ、次に実際にはどちらに行くかを挙手させ、圧倒的多数がモスバーガーを好むとしながら、実際にはマクドナルドに行く現状を確認した。これはファストフードにおけるニーズとは、迅速な商品提供、および割安感ある価格設定にあるためと説明を行った。講義に基づき、学生達にファストフードのマーケティングに関するミニレポートを作成させた。

⑪講義の受け方・講義ノートの取り方につき、『国際学部でいかに学ぶか』に即して説明を行った。

⑫論述試験の受け方につき、『国際学部でいかに学ぶか』に即して説明を行った。

⑬期末試験に相当する、読書レポートの書き方につき、説明を行った。また基礎ゼミナール全般に関する感想をミニレポートにまとめさせた。

(2)出席状況

おおむね良好といえた。最初の3回はほぼ全員出席、その後、2、3名の学生の欠席が目立ち始め、指導を行った。

(3)感想

大学という未知の世界に入るにあたり、学生達に居場所を与え、教員が関心を払い、授業と生活に関するガイダンスを行うという、誠に親切なシステムと感じた。筆者の学生時代を顧みるに、クラス制度は有名無実といえ、まったく機能しなかったことを思うと、基礎ゼミナールは良質の学生サービスと位置づけうる。基礎ゼミナールに参加した学生達も、居場所のある安心感を得たように思えた。基礎ゼミナールの指導にあたっては、『国際学部でいかに学ぶか』を参照したが、現行の研究者育成のシステムから教員になった者が、基礎ゼミナールの担当者として適任であるかにつき、若干の疑義をおぼえた。履修申告など教務事項につき、懇切な指導を行うことは、教育的効果として適切かどうか、疑問が残る。再び筆者の学生時代を顧みるに、履修申告の方法は手引きを見るしかなく、友人達と額を集め、真剣に登録をしたことを思い出す。登録ミスから留年のやむなきに至った学生のいたことを記憶する。かかる事務処理能力の涵養もある意味トレーニングといえるし、学生を大人として扱い、「突き放す」指導方法も必要とはいえまいか。昨今、議論のかまびすしいマナー教育についても、筆者自身の限界を感じた。いわゆる、若者のマナーの悪さとは、マナー逸脱の範囲を了解した上で、あえてマナーに反するという確信犯的行為と、筆者は理解する。マナーとマナー教育の問題は複雑かつ高度な問題といえ、いっそうの議論が必要と感じた。

基礎ゼミナールに参加した学生達は、教員に関心をもち、更には関心を惹起したいという様子さえうかがえ、身の引き締まる思いをおぼえたが、学年の上がるに従い、次第と教員に対する興味、更には学校に対する興味を失うのは、筆者の個人的印象か、何らかの必然なのか、調査の必要をおぼえた。国際関係学科の基礎ゼミナールを担当し、観光ビジネスコースを希望する学生の多いことを痛感した。しかしながら、現在の教員数や講座数、特にゼミナール教育を充実させるか否かは、学部全体、更には全学的なテーマであり、筆者の及ばぬところとはいえ、当初の希望に応ええぬカリキュラム構成を

まのあたりとすると、また希望したゼミナールの履修が叶わぬとき、学生達の著しい学習意欲の減退を招くことは自明といえ、少なからぬ基礎ゼミナール履修者から、実際にそうした声を聞いた。広義の観光産業は、わが国有数の産業規模を有し、全世界的に今後成長の見込まれる数少ない産業の一つといえる。また大学進学者数が頭打ち傾向にある中、女子の大学進学者数は上昇の一途にあり、観光教育を受けたいと願ひ、観光業界に就職したいと願う女子の多いことは、観光教育の必要と将来性を裏づける。アメリカには1000を越える観光（Hospitality）のコースが存在し、国際学部における観光プログラムは、アメリカ流のビジネス志向の観光教育たることを考えると、将来的にアメリカの観光教育界、観光産業界との提携をも視野に収めうるため、基本的に良質のものとする。少なくとも、現在多数の学生が、観光教育を受け、観光産業への就職を希望する以上、その希望に応え、学部改組などをにらみながら、現行の観光教育プログラムを更に整備させ、充実させることを急務と感じた。

以上、基礎ゼミナールを担当した実施報告と感想を記した。いまだ実験段階にある試みとはいえ、筆者自身、基礎ゼミナールを担当しながら、学生達の生の声と接する機会が増え、研究と教育の原点と向き合わざるをえず、教員と学生の双方に益するものと感じた。筆者のバックグラウンドや専門に鑑み、自由裁量の余地を残しつつ、教員相互のコンセンサスに基づいた、魅力的講座と発展することを念願する。

3. 小林勝法ゼミナール（2001年度）

(1) 授業の目的

ゼミナールを通して行ったことは、自分の夢を実現するための調査と計画立案に取り組みせ、その結果を口頭発表させ、レポートにまとめさせることであった。その過程で様々なスタディスキルを学ばせることを企図した。

自分で調べたことをまとめるだけの学習レポートではなく、目的・方法・結果・結論といった研究レポートとしての形式を学ばせることを重視した。そのためにレポートの構成を統一して学生に徹底させた。そして、レポートのテーマである自分の夢に関して、6種の資料を使って調査させた。それらは、百科事典と専門事典、インターネット、AV資料、図書、専門家へのインタビューである。この調査によって、課題に取り組む前にまずしなければいけない基本的調査を実習させるとともに、図書館の利用法や、インターネットの検索、インタビューのしかたなどを学習させた。

そして、最後に結論として、夢を実現するために大学4年間をどう過ごすかについての計画を立てさせた。このことで漠然と描いていた夢を実現するために最初の一步を踏み出せたのではないかと思っている。例えば、ある学生は、ツアーコンダクターになる夢を持ち、実際にその仕事をしている人にインタビューしたり、旅行業務取扱主任者試験について調べたり、旅行会社の求人情報を調べて、4年間の計画を立てた。

(2) 授業方法

①用いた方法は、テキストの輪読とその補足説明のほかに、討論や発表である。

また、箱根に一泊旅行に行き、金時山登山をした。その夜には、学生生活や人生設計についてディスカッションをし、翌日は、球技大会の練習などを行った。

②使用した教材は、共通テキストの『国際学部でいかに学ぶか』のほか、配付資料（レポートの構成など）である。

③出席調査方法は点呼で確認をした。その時に近況や考えていることをひとりひとり短いスピーチで発表させた。

④一日の授業の進め方の典型例を示すと以下の通りである。

点呼（近況報告）→テキストの輪読と補足説明→討論→レポートの添削指導

⑤ほとんど毎回、宿題を出し、レポート作成の作業をさせた。そのようにして、授業外での学習を指導した。

(3)評価方法

配点は、平常点60点、口頭発表10点、期末レポート30点とした。結果は、90～100点が2人、80～89点が4人、70～79点が9人、60～69点が5人である。平均は73.4点で合格すれすれのものが5人もいた。不合格は2人である。うち一人は初めのうちの3回しか出席していない。

(4)学生の反応

自分の夢を実現するための調査と計画立案に取り組んできたが、「漠然としてきた自分の将来がはっきりしてきた」とか、「目指す職業に就くためにしなければいけないことがはじめて具体的にわかった」、「4年間の過ごし方が変わってくると思う」などの感想があった。

(5)担当しての感想と提言

基礎ゼミナールを担当して2年目なので大分様子が分かっていた。そのため安心して授業を行えた。そこで、宿泊研修を敢行した。これが2001年度のメイン・イベントであった。バスや宿の手配、登山中の事故などうまくできるか心配したが、概ね成功したと言えよう。参加者は18名で、4名が法事への出席や当日に体調を崩したため参加できなかった。金時山登山中は、曇りから小雨へと天候がすぐれなかったため、富士山の雄大な姿を見ることができなかったが、学生たちはともに登山の苦楽を味わうことで、随分親しくなったようだ。その夜のディスカッションも夜遅くまで続いた。

しかし、教師とどれだけ親しくなれたかという点、担当者から見て今ひとつ不満足である。それは、時間に追われ、十分に学生と交流できなかったからである。テキストをしあげなければならないし、レポートを完成するよう指導しなければならないので、いつも気が急いでいた。気持ちにゆとりがかけられていたように思う。この点が一番心残りである。

レポート指導については、前年よりうまくいった。その一番の理由は、学生の出席率と提出率が前年より高かったためである。これらの理由が、学生の質の違いか、ゼミナール生同士のまとまりの違いか、開講曜日時限による違いか、あるいはそれ以外の要因によるのかは不明である。しかし、問題が二つある。一つは、学生の夢が曖昧であることである。推薦入学試験の時などには立派な抱負を力強く語るものだが、このようなレポートで具体的に自分の夢について必要なことを調べさせて、実現に向けて計画を立てさせようとする、ただ「英語を学んで国際的な仕事をしたい」というような曖昧なものからなかなか具体化できないでいた。男子学生の中には、卒業後、ワーキングホリデーに行くとか、海外旅行に行くなどで、職業に結びつく夢を持っていないものも数名いた。職業観に対する指導の必要性を強く感じた。もう一つの問題は、レポート指導に労力がかかることである。配付資料で詳しくレポートの雛形を示し、口頭で説明したにもかかわらず、個別に添削指導するときは何度も同じことを繰り返して説明しなければならなかった。同じ学生に2度3度と繰り返すこともあった。そのために随分と時間がとられたし、体力も消耗した。手が掛かるからこそゼミナールにしているわけであるが、個別指導に力を入れるのであれば、20名を超える受講者数は多すぎる。他大学では10名ほどでクラス編成をしているところもあるのだから。

V. まとめと提言

大学の大量化・全入化により、入学者の学力の多様化と低下、勉学意欲の低下の問題が深刻になっている。そこで、これらの新入生に対し、大学での学修についての知識と技能を教授し、動機付けを図る大学導入期の教育が重要性を増してきており、各大学は様々な試みをしている。そのうちの 하나가、大学1年次のゼミナール開講である。1997年時点では全国の大学のうち40%あまりがこのような科目を開講している。

受講生を対象にしたアンケート調査からは、基礎ゼミナールの目的が概ね達成されていることがわかった。

しかし、実施のしかたについては改善すべき点が担当教員から指摘されている。それは、受講者人数の少数化や担当教員の裁量の拡大、指導内容の精選と重点化などである。基礎ゼミナールと他の科目の連携を図ることも今後の課題である。これまで2年間してきたように、指導のノウハウを交流したり蓄積したりすることが基礎ゼミナールの充実のために必要である。

(付記) 本研究は、文教大学国際学部共同研究表(1999年度)の助成を受けた「大学導入期教育の充実に関する研究」(研究者代表:小林勝法)の一環として行ったものである。

文献

- 1) 伊藤彰浩、「データで見る大学の100年」、『IDE 現代の高等教育』No. 424、68-73、2000年
- 2) マーチン・トロウ、天野郁夫・喜多村和之訳、『高学歴社会の大学：エリートからマスへ』、東京大学出版会、1976年
- 3) ピーター・サックス、後藤将之訳、『恐るべきお子さま大学生たち』、草思社、2000年
(原著: Peter Sacks, *Generation X Goes to College*, Open Court Publishing Company, 1996)
- 4) 新潟経営大、新入生に「ガイダンス教育」、日本経済新聞、2001年6月2日付
- 5) 古川登美子、ユニバーサル型大学での基礎演習〈2年間の実践〉、フォーラム・イン・京都(2001年3月20日、キャンパスプラザ京都)発表資料
- 6) 奈良雅之ほか、「大学教養教育における基礎・教養・言語表現等演習に関する検討」、『大学教育学会誌』20(2)、141-146、1998年